

大道芸人と渡り職人 —マラルメ作「縁日芝居前口上」と 「葛藤」の日本語訳

岩 田 駿 一

1. 今回は「縁日芝居前口上」と「葛藤」を取りあげる。両者とも『ディヴァガシオン』中の「I 逸話もしくは詩篇」部門13篇に収められている。遙か昔にこの2篇の散文詩について最初に拙い日本語訳を試みてから、折に触れて手直しを繰り返してきた。ほとんど全面的に解釈を変更した箇所も多い。しかし今こうして眺めてみるとさして良くなっているとも思えない。不可解なところは相変わらず判らないままだし、曖昧な言い回しが氷解したわけではない。むしろ謎が深まった部分さえある。この辺りが一応のキリの付け時だろう。ここで思い切って公表して、奇特な方がいらっしゃれば、ご意見・ご批判を仰ぎたい。

念のため先ず『ディヴァガシオン』全体の目次と該当部門13篇のタイトルを示すと次のとおりである。

前書き

I 逸話もしくは詩篇 (13篇)

- (1) Le phénomène futur 「未来の現象」
- (2) Plainte d'automne 「秋の嘆き」
- (3) Frisson d'hiver 「冬の戦慄」
- (4) Le démon de l'analogie 「類推の魔物」
- (5) Pauvre enfant pâle 「あわれな蒼ざめた少年」
- (6) La pipe 「パイプ」

- (7) Un spectacle interrompu 「中断された見世物」
 - (8) Réminiscence 「淡い記憶」
 - (9) La déclaration foraine 「縁日芝居前口上」
 - (10) Le nénuphar blanc 「白い睡蓮」
 - (11) L'ecclésiastique 「聖職者」
 - (12) La gloire 「栄光」
 - (13) Conflit 「葛藤」
 - II 寝椅子のうえの書物（2篇）
 - III メダイヨン（ロケット入り肖像画）とポートレート（11篇）
 - IV リヒャルト・ワグナー、——一フランス詩人の夢想
 - V 演劇覚え書き（「芝居鉛筆書き」とも訳される観劇メモ）（10篇）
 - VI 詩句の危機
 - VII 本のこと（3篇）
 - VIII 文芸のなかの神秘
 - IX 聖務・典礼（3篇）
 - X 大三面記事（9篇）
- 書誌

筆者はこれまで早稲田大学政治経済学部「教養諸学研究」の場を借りて「X 大三面記事」9篇の日本語訳を断続的に発表してきた。即ち：

- (1) Or 「黄金」
- (2) Accusation 「非難」
- (3) Cloîtres 「修道院」
- (4) Magie 「魔術」
- (5) Bucolique 「牧歌調」
- (6) Solitude 「孤独」
- (7) Confrontation 「対決」

(8) La cour 「宮廷」

(9) Sauvegarde 「庇護」

「大三面記事」という一種の矛盾語法で表されるこの最終部は、世界における詩・文学のあり方、意味、詩人・文学者の社会における生き方といった根本的・原理的な問題を、折々の三面記事的話題に絡ませて語った社会時評で、表現形式、文体、内容ともに、マラルメの独自性がきわめて濃密に染み込んでおり、見方によってはもっともマラルメ的といえる注目すべき文章ばかりであった。今回取りあげる「縁日芝居前口上」と「葛藤」も、散文詩部門に分類されているが、マラルメの社会的関心、とりわけ大道芸人や道化役者、及び肉体労働者や季節労働者といった、社会の周縁を放浪・漂泊して生きる下層民に対する複雑な思い入れが充ち満ちている点では同工異曲である。殊に「葛藤」の初出は月刊誌「ラ・ルヴュ・ブランシュ」に1895年2月1日より11月1日まで「一つの主題による変奏曲」という総題のもとに連載した記事10篇中の第7篇であり、その9篇目に相当し後に「大三面記事」の(7)に配置された「対決」と酷似した内容をもっている。「芸術至上主義」(「芸術のための芸術」)の総帥と目される一般のマラルメ像とはかなり食い違っており、しかもそれがわざわざ「散文詩」部門に編入されている点で尚更留意すべき作品なのである。

ついでにここで『ディヴァガシオン』以前のプレオリジナルに簡単に触れておこう。(残念ながら草稿に目を通すことは叶わなかった)

「縁日芝居前口上」の方は：

「芸術と流行」L'Art et la Mode, 1887年8月12日号

「若いベルギー」La Jeune Bergique, 1890年2月号 (『パージュ』のテキスト)

『パージュ』単行本、1891年5月、ベルギーのエドモン・ドゥマン書店より刊行
「葛藤」については前述の通り：

「白色評論」(「ラ・ルヴュ・ブランシュ」) La Revue blanche, 1895年8月1日号
があるのみで、ベルトラン・マルシャル校訂プレイヤード新版『マラルメ全集』

第1巻の周到なNotes et variantesによれば、いずれの作品も特筆すべき異文は見当たらない。

2. 次にそれぞれの「散文詩」（もしくは「逸話＝身辺雑記」）の解題を略述する。

(i) 先ず「縁日芝居前口上」の要旨から。

孤独を求め馬車で郊外へくりだした私は、連れの女性と共に、沈黙に包まれた豪華な落日を楽しむ。が、突如として沈黙は祭りの喧噪に破られる。

祭りとは、民衆にとってほんの一時にせよ全世界を封じ込めるもの。やむなく私は連れとともにその動揺に身を投ずる。しかし物足りない思いでいるところへ、忽然と無人の掘っ立て小屋が現れる。

詩人の想像は広がる。たんなる乞食小屋が断食僧の修行場に変じ、秘蹟が演ぜられるべき舞台となる。しかし無一物の小屋の主は祭りという非日常的祝祭空間に参加する手だてがない。

ここで「鷹揚な」物腰の「社交界の女」が登場する。冒頭の私の連れとはこのひとだったのか。遊覧馬車の揺れにまどろむ女性たちの中で、ひとりだけ目覚めて、舌先三寸の褒めことばによそよそしい笑窪を浮かべて見せたひとなのかどうか、定かではない。この「…夫人」は「おまえ（＝わが乙女イデア）だけが知っている誰か」だ。

彼女は小屋の主の窮境を救おうとテーブルの上に立ち、見世物としてわが身を曝す。「踊りも歌も添えず」ただ佇立するだけの女を、「生きた寓意」として観客に呈示するために、私は縁日芝居の口上を述べる香具師役を務める。その口上とは、ここで朗唱される「イギリス・ルネサンス時代のソネット様式」に則った韻文詩にはかならない。

詩篇で讃えられているのは女の金髪だ。金髪は本来唯一の、内部の火の炎上。豊かな金髪をもたない（丸裸の）男など女の辱めにしかない。日没後、女

は金髪を燦めかせて夜を照らし、黒い疑惑から世界を守護する松明となる。

なにやら腑に落ちぬ様子で、評価を宙づりにしたまま帰途につく聴衆といっしょに外へ出た女性と詩人。二人の間で、おおよそ次のような遣りとりが交わされる。

「結構でした」。「私の胸に忘れられない物事の記憶が宿りました」と親愛なる夫人はお礼を述べ、「でも、たとえば馬車に籠もりきりで同伴の孤立に甘んじていたのでは、あの口上を私の前で表明する緒がなかったのではありませんか」

詩人は答えて、「仰せのとおりです。(…) その一語一語が人さまざまの鼓膜を経てあなたのもとまでこだましていき、多彩な理解へ開かれた精神を魅了するにいたらなかったとしたら、あなたもそんなに感心しなかったはずです」

—「きっとね」と、二人の思いは華やいだ夜風のなかでひとつになる。

見てのとおり、この詩は冒頭から夢とも現ともつかぬ仕立てになっている。どこまでが現実でどこからが幻視か、境界が曖昧な世界。両義性、多義性、(ambiguïté, alternatives) に満ち、すべてが幻想、白日夢かとさえ思わせる。確実なのは文章の力のみだ(曖昧な言い回し、多義的な構文の意識的な使用が目立つ)。

問題はタイトルに言う「口上」、即ち作品の中核をなす韻文詩が述べる「金髪の女」に代表される女性たちを、どう捉えるかである。

いったいこの作品には他にどのような女性が現れるだろうか。

「夢また夢」の存在として馬車の中の私の隣に無言でまどろむ複数の女性たち。そのなかで「ひとりだけここにはっきりと事態を見きわめている」女性。「彼女の気配りが行き届いたお洒落は、いわばおのれを連れの男に委ね、相手の意に適うように一日が終わるのを願うもので、それを声高に褒めそやしても、舌先三寸の接近に反して、聡明な微笑の笑窪となって終わる距たりを表情に浮かばせることしかできまい」。また、「…の祭礼よ」と「倦怠の影もなく澄

みとおった」声で指示を出し、馬車を止めさせた、「私の気晴らしに同乗した乙女」。この乙女は祭りの喧噪の中で「計画の変更に慌てず騒がず、純真な腕をあずけきりにしている」。マラルメの愛娘ジュヌヴィエーヴの面影を宿したこの乙女は、「(わたしが) 周囲に溶けこまず、その傍らでしばし二人きりで過ごそうとしたわがアイデア son idée (即ち mon idée)」であると考えてほぼ間違いなからう。

マラルメ晩年の愛人とされるメリー・ローランを偲ばせるもうひとりの「社交界の女」も唐突に出現する。成熟した雰囲気のを漂わせるこの「鷹揚な」態度の女は、作品冒頭で紹介される「事態をはっきり見きわめている」女性とは一見違って見える。あちらは月並みな讃辞にはよそよそしい微笑みをもって応え、郊外の縁日の賑わいに初々しい好奇心を示し、私に「純真な」腕を預けて見物して回る。私の内なるアイデアの化身というに相応しい乙女である。一方こちらは「鷹揚」な物腰に、謎めいた宝石で胸を飾り、「夕べをともにする同時代の女性」。「…夫人、(…) おまえ (=わがアイデアなる乙女) だけが知っている誰か」だ。芝居小屋の台上に立つその姿は「クレープ織りの青白い帽子が、煙るように、また、庭園の贅を尽くした切り花によって明るく浮かびあがる、彫像さながらの全身を包むドレスと同色だが、ドレスの裾は観客のほうに一歩進めた片足を覗かせている、その足も他と同じ紫陽花色だ」。ここで私は道化役に早変わりし口上を述べる、「ここに謹んでわが身をみなさまのご判断に委ねました女性は、おのれの魅力の神髄をお伝えするために、舞台衣装やありふれた小道具のたぐいは一切必要としておりません。この天然自然さを飾るのは髪だけです」

マラルメは idée あるいは âme という女性名詞に、女性一般のエッセンス、原型を担わせる。マラルメが現実遭遇したあらゆる女性はこのエッセンス・原型がさまざまな形をとって具現したものと解しうる。たとえば韻文詩「ブローズ」の私は二人になって「風景の様々な魅惑」を眺め、分身に「おお、妹よ」と呼びかける。演劇時評「芝居鉛筆書き (観劇ノート)」のなかでは私の内な

る観念・魂が「かくも異常・繊細なるご婦人」に化身して、そんなご婦人を芝居小屋などに連れてきたことを私に後悔させる。

さてこれらの分身はみな女性であって、私はいわば両性具有者である。詩人マラルメの中には、ヘルマフロディトス（両性具有の神Hermaphrodite）が棲む。男性名詞esprit 精神と、女性名詞âme 魂あるいはidée アイデア。したがって分身は男性の場合もある。「牧歌調」の語り手は「虚空に輝く精霊」＝精神としての私と、その地上的存在、いわばうつそみとしての気の置けない「紳士」monsieurに分裂する。この「紳士」は、初出テキストによれば、「精神」たる私が「ラ・ルヴュ・ブランシュ」の連載記事のため「ひとつの主題」を巡って熟慮を重ねる合間の息抜き芝居、幕間狂言に、私の身代わりをつとめる道化役（histrion, pitre）だから、男性の方がふさわしかろう。

「縁日芝居前口上」においても、語り手の「私」は掛け小屋の急造舞台に立った女性の金髪を讀える口上係の道化、もしくは吟遊詩人役を務めるのだ。

韻文、散文を問わず、マラルメが特に好んで登場させる二種類の職能がある。大道芸人と渡り職人である。一方は大道芸人、辻芸人、旅役者、曲芸師、軽業師、道化役者（pitre, histrion）、さらに中世の吟遊詩人まで含む。そしてもう一方は肉体労働者、とりわけ季節労働者のような渡り職人（こちらは次の「葛藤」で重要な役を果たす）。双方とも自前の芸や肉体を元手に世界の底辺・周縁を放浪する漂泊者、遍歴者だ。

こうして「縁日芝居前口上」は変幻自在の分身譚、変身譚となる。必要に応じて多重人格を帯びうるのは文学者（詩人、小説家）の特権であろう。そしてこの散文詩は、日本の落語や講談のようなひとり芝居、あるいは心の中で（アイデアを通して）台詞が遣り取りされる自作自演のバントマイムと見なせるかもしれない。

(ii) 続いて「葛藤」の粗筋を示す。

私の関心が現実そのものではなく自分の内部に潜む原理に向かい、そこから

ほとばしりであるものを汲みだすのを好むようになって久しい。

こうした心性にうってつけの環境が人里離れた一軒家であり、私は毎年そういう廃屋を選んで夏の休暇を過ごしてきたのだが、急に鉄道が敷設されることになり、私の宿舎は鉄道工夫用の飯場と化してしまう。

これまで私は、これらの渡り職人を、独立独歩の境地を歩む労働者らしい労働者と見て、ひそかな好意を寄せてきた。

しかし鶴嘴とシャベルという、未開墾の大地を受胎させる性的な道具を肩に、わがもの顔に闊歩するこの騒々しい同宿者たちは、雑音と雑踏をなによりも嫌う私には敵となる。自分の権利を守ろうと、法律家になったつもりで、心の中で彼らとあれこれ論戦をまじえる。

そして詩人としての自分が、ブルジョアの隣人たちよりも、むしろ彼らプロレタリアに近いことに気付く。「(…)私物化する権利を(…)生きているかぎり頑なに一たとえ取得する手段があっても無視して—とり逃がしつづければならぬ、なにひとつ所有せず通り過ぎるにとどめたいという、なんとも奇妙な本能を満足させるために」

だが本当にプロレタリアと一体化する時節が到来する日のことを思うと、「互いに矛盾しあい徒に歪められたふたつの身上が引き起こす苛立ち」にとらえられ、悪態をついて私に挑みかかる酔漢の幻影さえ生まれる。反発と共感が交錯し、心の中で「葛藤」を演ずる。

実のところ、今彼らはみな砲弾を浴びて倒れ伏す兵士のように、芝土に身を投げ出して眠り込んでいる。週の大半を苦しみぬいてなんとかパンを得ようとし、今や「眠りという、停止と、待機と、束の間の自殺によって」あたり一面に散らばる「禍の犠牲者たち」。私はこの禍の謎を理解し、その務めを判断してやらねばならない。

頭上では星座がきらめきをましてくる。この盲いた群れの心の闇にも、「やがて思念の星座が現れ、いつまでも照らしつづけて欲しい—事実を正確に見きわめ、はっきり口に唱えられるように」

じかに四大・自然を相手にする仕事の職人たち、「私はそこに民衆を見てしまう一筋骨による人間の条件の理解が、日々彼らの背骨を湾曲させる、そうして、麦を伸立ちにせず、即時にパンの臨在を保証する生命の奇蹟を引きだすのだ」

眠りの中で出自は匿名性に埋没する、「そして果てしのない眠りは、万物の生成源、大地に耳をつけ、過去の全世紀に押し拉がれるとともに未来の全世紀に伸び広がり、永遠へと到る、ただしそれが可能なかぎりで一つまり人間社会の規模に矮小化されて」

マラルメは群集・民衆（定着農民は含まれていない）にいわゆる両面感情（アンビヴァレンツ ambivalence）を抱いており、特に肉体労働者には頭ではその存在を理解しながら、心情的には反発していたかに見える。この「散文詩」にはその葛藤が活写されている。詩人を「エリート」と呼ぶ一方で、放浪芸人や肉体労働者など社会の周縁者、下層民に対しても共感を隠さない。

マラルメは遊芸者、とりわけ放浪の旅役者や大道芸人には度々自己を投影し、特別の思い入れを示していた（「淡い記憶」、「秋の嘆き」、「未来の現象」、旅回りの一座を組織して『イジチュール』に酷似した筋立ての芝居を見せて回る20歳代末の夢、その他さまざまな形をとって現れる）。その一方で労働者、とりわけ頑健な肉体だけを元手に各地を放浪する粗野で無知な渡り職人に対しては、アンビヴァレンツから脱することが出来ない（「対決」にもっとも顕著）。「かつて道で出会ったとき、いかにも労働者らしい労働者としてひそかに好意を寄せた人々だ。噂では渡り職人ということだった」。「(…) 私物化する権利を (….) 生きているかぎり頑なに一たとえ取得する手段があっても無視して一とり逃がしつづけなければならない、なにひとつ所有せず通り過ぎるにとどめたいという、なんと奇妙な本能を満足させるために。(…) この本能は私をプロレタリアに近づけつつある」。しかし「だが今から見当がつく、私が本当にプロレタリアと一緒にいる時節が到来したら、共感と反発を交々に覚える

であろうと…」

語り手「私」の場所は、毎年夏のヴァカンスに訪れる廃屋の「無傷な一隅」だ。夏の午後、館に到着すると一年ぶりに錠戸を開け放ち、鉄道敷設のためにすっかり様変わりした窓外の景色を眺める。階下の騒音や傍若無人な話し声に悩まされながら、工夫たちと心の中で架空の対話を交わす。この「アネクドート（身辺雑記）」には窓に凭れて夜空に星が瞬き始めるまでの間、物思いに耽る語り手の心中に去来する出来事が描かれている。身辺雑記から詩・文学、詩人・文学者と社会との関係をめぐる随想、考察へ、時空を超越した幻視へ。ここでもやはり確実なのは文章の力のみだ。詩人の幻視はことばの力を得て「今、ここ」を足場に、過去と未来、天と地の果てまで時空を超えて広がる。

若いマラルメはかつて親友宛の書簡（1867年3月27日付ウジェーヌ・ルフェビュール宛）で「破壊はわがベアトリーチェとなった」^(注1)と宣言した。彼にとって詩人・文学者とはエリートはエリートでも、市民社会とは相容れない、その周縁もしくは外部に生息する反エリート、本来市民社会には危険な存在と云うべきかもしれない。

いったいマラルメにとって本音はどこにあるのだろうか。そもそも言語への徹底した依存、その潜在力への極端な信頼以外に、この「骨の髄まで統辞家」^(注2) syntaxier と自称する文人に「本音」なるものが存在するのだろうか。

3. 最後に翻訳に使用したテキストについて一言しておく。

1998年はマラルメの没後100周年に当たり、注目すべき催し物や出版物が続出した。中でも特筆に値するのはプレイヤード叢書で半世紀ぶりに装いを新たにお目見えした『マラルメ全集』^(注3)だ。『ディヴァガシオン』は2003年刊行の第2巻に収められている。（ただし「散文詩」部門のテキスト、及びNotes et variantes は1998年刊行の第1巻の方が詳しい）

この新全集は本文校訂の上で旧版とは比較にならぬほど進化し、テキスト研究の蓄積された諸成果はもちろん、旧版以降に発見された自筆原稿や校正刷

り、プレオリジナルなどが能うる限り幅広く、そして正確を期して盛り込まれている。おそらく今後のマラルメ研究はすべてこの新全集版テキストに依拠せざるをえず、従来の研究もそのいくつかは見直しを迫られることになるだろう。

翻訳テキストは底本としてこのプレイヤード新版を用いる。必要に応じてイヴ・ボンヌフォワが校訂したガリマール社ポエジー叢書中の『イジチュール、ディヴァガシオン、一振りのさいころ』^(注4)、『ディヴァガシオン』初版本^(注5)、「ラ・ルヴュ・ブランシュ」1895年8月1日号の初出テキスト^(注6)、多賀書店刊『マラルメのテキストデータベース：ディヴァガシオン』^(注7)、プレイヤード旧版『マラルメ全集』^(注8)などを、適宜参照する。

注

- (注1) Stéphane Mallarmé: *Correspondance 1862-1871*, recueillie, classée et annotée par Henri Mondor, Paris, Gallimard, 1959 ; p.246 (日付はプレイヤード新版第1巻により訂正)
- (注2) Cité par Henri Mondor; *Vie de Mallarmé*, Gallimard, 1950; pp.506-7
- (注3) *Œuvres complètes*, éd. Bertrand Marchal, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2vol. 1998-2003.
- (注4) *Igitur, Divagations, Un coup de dés*, Préface d'Yve Bonnefoy; Paris, Gallimard, 1976.
- (注5) *Divagations*; Paris, Bibliothèque-Charpentier, Eugène Fasquelle, éditeur, 1897.
- (注6) Stéphane Mallarmé: *Variations sur un sujet, VII.-Conflit.*, in *La Revue Blanche*, le premier août 1895. (フォトコピー)
- (注7) *Mallarmé's Text Database: Divagations, I Text*; Tokyo, Taga Shuppan, 1991.
- (注8) *Œuvres complètes*; texte établi par H. Mondor et G. Jean-Aubry, NRF, Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade), 1945.

他に：

Igitur, Divagations, Un Coup de dés, éd. B. Marchal, coll. Poésie/Gallimard, 2003.

縁日芝居前口上

沈黙！確かに私の傍らでは、夢また夢と、どんな女性も一ひとりだけここにははっきりと事態を見きわめているが―遊覧馬車の揺れにまどろんで華やかな歓声を上げるのも忘れ、私はおかげで一言も発せずにする。彼女の気配りが行き届いたお洒落は、いわばおのれを連れの男に委ね、相手の意に適うように一日が終わるのを願うもので、それを声高に褒めそやしても、舌先三寸の接近に反して、聡明な微笑の笑窪となって終わる距たりを表情に浮かばせることしかできまい。だがそうは間屋が卸さないのが現実である。案の定、無慈悲に沈黙はやぶられた、折しも夕陽がランドー馬車の上塗りに照り映えて絢爛と消えていくのが感じられ、その外側では、郊外の日没には過分なほどの暗黙の至福のさなか、怒号めいたものが騒然として四方八方へ闇雲に広がる、万物が例によって甲高い哄笑を上げ、勝ち誇る金管楽器が鳴り響く。つまり、周囲に溶けこまずわが乙女アイデアと差し向かいでしばし過ごそうとした者には、耳障りな不協和音そのものであり、生存の憑依に肌身を曝すことになるのだ。

「…の祭礼よ」と一聞き慣れない近郊の集落！一、私の気晴らしに同乗した乙女が名指したが、その声は倦怠の影もなく澄みとおっていた。私は言うとおりに、馬車を止めさせた。

この動揺から得る代償は、わが精神のどんな分身にも是認しうる形象解釈の欲求しかない、たとえばイリュミネーションのランプが整然と並び、火が点るにつれて唐草紋様や象徴図像が徐々に浮かんでくるようなものだ、だが孤独を逸しさった今、私は意を決し、むしろ勇躍して踏みこむ、先に私が優雅な道行

きへと逃避した一切合切が、ここに故意に解き放たれて憎々しく荒れ狂うなかへ。乙女は計画の変更慌てず騒がず、純真な腕をあずけきりにしている。その間私たちは露店の放列に眼をやりながら進んでいったが、この驚天動地の遊歩道こそすべての縁日の区別を撤廃して同一の騒動のこだまと化し、そこに群衆はほんの一時、全世界を封じ込めるのだ。これ見よがしの羽目外し争いも、彼方、奇怪な緋色の黄昏を楽しんで滞留する私たちに寄り道させたほどのものとしては飽き足りないが、その後、大火に紛う雲と拮抗して私たちを引き止めたのは、忽然と現れた人間界の光景。派手に塗りたくった大袈裟な文字入り看板にも拒まれ、どうやら無人の芝居小屋だ。

入口にはつれたマットレスが掛けられ、時代を問わずあらゆる神殿の垂れ幕さながら、ここで秘儀が執り行われることを即興で仄めかそうとしているが、このマットレスが誰のものにせよ、断食中いつも身近にありながら、歓喜にふるえる希望の吹き流しよろしく掲げられるまで、持ち主の心に、なにか人に見せる奇跡の幻覚を生ずることはなかったのである（飢餓ゆえの空しい悪夢以外に）。しかしながら、日々の悲惨と対照的なこの友愛に満ちた雰囲気—祭りという神秘的なことばがたんなる原っぱを一変させ、原っぱが地面を踏み固める無数の靴音から帯びる性質だが（まさにそうした理由で、衣服の底で無情な1スー硬貨も、ただ消費される目的だけのために外に出ようというまたとない気持ちは起こす）—この友愛の雰囲気に動かされてやはり彼も一つまり、祭りに加わる選ばれた者のひとりになるには売るか見せるかしなければならぬ（だがいったいなにを？）という観念のほかまったく無一物の誰かも、ためらいを抑えてこのめでたい集いの招きに応じたのであった。あるいはごく散文的な言い方をすれば、芸を仕込んだネズミが一彼自身すなわちこの乞食が、力士のようにたくましい筋肉に頼って観衆の喝采をとりつけるわけにはいかないとすれ

ば一肝腎なとき手元に欠けていたのだ、こういう事態は、時勢全般に督励されて人がなにかを始めようとするたびによく起こるのだが。

「太鼓を鳴らしなさい」と…夫人が一乙女よ、おまえだけが知っている誰かだ一、時代遅れの太鼓を指して鷹揚に勧めた。そこから身を起こすのは、組んでいた両腕をひろげ、魅惑のかけらもない自分の小屋に立ち寄っても無駄なことを表わしているひとりの老人、彼はこの人寄せ打楽器に馴染んできたために、意図せぬ意図へと誘われた。するとあたかも、これからすぐ対面できるかもしれないこよなく美しいもの、その謎が、社交界の女の胸元を封印する宝石によって、キラキラ輝きだすかのよう！その姿は瞬時に消え、不意に起こったけたたましい轟きに呆気にとられて立ち竦む群衆を前に、私はまるで木偶の道化、騒音に聳してわが内なる不易のうた声が最初は自分にも聴きとれなかったのだ。「さあさ、みなさん、どうぞなかへお入りください、お代はたったの一文、演し物が気に喰わない向きにはお返し申します」両手を合わせてありがたい老人の手のひらに、麦わら帽一聖人の頭上を飾る後光か一に貯まった金をあけてやり、帽子の三色旗リボンを打ち振って遙かに合図を送ると、頭にのせ、群衆を割って前進しようとする、群衆は、夕べをともにする同時代の女が、率先してこの夢を欠いた場所と謀り、為しとげえたことの秘密のなかに立ちつくす。

女は膝から上を人目にさらし、テーブルに乗って、あまたの頭上に抜きんでている。

よそから迷いこんだひとすじの光がスポットライトとなって女を射る、それと同じほど鮮明に、私につぎの推測がひらめいた、すなわち彼女はまったくの身ひとつなので、流行、気まぐれ、天の配剤などがおのれの美しさをつぶさに説き明かしてくれるままに、踊りも歌も添えず、群衆に向かって、誰かのために乞うた施しの礼を、惜しみなく返そうとしているのだ。同時に私は理解した、この微妙な興行の正念場でなすべきこと—群衆の好奇心の離反を祓い清めるには神通力のようなもの、たとえば^{メタファー}暗喩の力に縋るしか道はないことを。急げ、あまたの表情がぱっと明るくなり安堵が広がるまでまくしたててやるのだ、連中はひと目見て把握しきれないと、ことばが持つ明証性—じつは高嶺の花なのだが—に従い、適正にして高級という思いこみ、要するに確かに自分は誑かされていないという推定とひきかえに、木戸銭を出すことに同意するのだから。

最後に、女の髪に一瞥をくれる、クレープ織りの青白い帽子が、煙るように、また、庭園の贅を尽くした切り花によって明るく浮かびあがる、彫像さながらの全身を包むドレスと同色だが、ドレスの裾は観客のほうに一步進めた片足を覗かせている、その足も他と同じ紫陽花色だ。

そこで朗唱する：

女の髪は 炎の飛翔 欲望の西洋の
最果てに 振り乱されて燃えさかる
今収まれば（鎮火して王冠と化すか）
昔の火床 戴冠の額へと 束ね卷かれる

だが願わしい金は あの生きた黄金雲のみ
 つねに内部に潜む火の炎上 これこそ
 本来ただひとつのもの 受け継ぐのは
 まことを告げ 笑みを湛える 眼の宝石

丸裸の男は 優しくても 女を辱めるだけ
 女は星の光もダイヤも指に揺らめかせず
 その栄光をひたすら単純に誇示するために
 金髪を燦めかせて偉業を成就する 即ち

暗夜に紅玉をちりばめ 黒い疑惑を剥ぐ
 さながらに 嬉々として闇を照らす松明*

このように、生きた寓意を彫り上げる支援をしようとしたのだが、おそらく私にそれっきりなめらかな口上が続かなかったせいで、像は早くも佇立をやめゆるやかに翼をたたんで地面に降りようとしている。私はそこで今度は客たちの理解力に合わせて彼らの茫然自失を断ち切ろうと、見世物本来のあり方にたち戻るふうを装いこうつけ加えた、「紳士淑女のみなさま、じっくりご覧いただきたい、ここに謹んでわが身をみなさまのご判断に委ねました女性は、おのれの魅力の神髓をお伝えするために、舞台衣装やありふれた小道具のたぐいは一切必要としておりません。この天然自然さを飾るのは髪だけです、髪こそ古来女性を表わす最も重要なモチーフのひとつであり、化粧はつねにこれを申し

分なく引きたたせる役割を果たしてきました。そしてみなさまの好意的な賛同が確信させてくれるとおり、それだけで充分なのであります」。「もちろん!」、「その通り!」、「然り」など身に余る掛け声や、両手を気前よく叩いて贈られるいくつかの喝采を除くと、評価を示す反応を宙づりにしたまま、人々は木立も闇夜もない空漠へと続く出口に向かった。私たちもその人波に混じって進んだが、まだ白手袋の少年兵がひとり待機しており、股高く留められたガーターを高貴なガーター勲章のように拝めば手指のこわばりがほぐれ、大人になれると思いこんでいた。

—「結構でした」と、親愛なる夫人は賛意を表した、星座から、あるいは葉の繁みからまっすぐに降り注ぐ息吹を飲み干して、そこに平安をとり戻そうとするのではなく一彼女は成功を疑っていなかったから一少なくとも普段どおりのひんやりとした声音を回復しようとしながら「私の胸に忘れられない物事の記憶が宿りました」

—「いや、たんなる紋切り型に過ぎません、美学上の…」

—「でもどうかしら、それを私の前でどのように表明する緒がなかったのではありませんか、たとえば馬車に籠もりきりで同伴の孤立に甘んじていたのでは一馬車はどこ?一馬車に戻りましょう。一ところがそれは無理強いされて跳びだしたのです、お腹を乱暴に拳骨でなぐられたように。こうした強打は観客の急な催促によるものですから、お客に即刻なにか挨拶を述べなければなりません、かりに空想でも…」

—「空想とは、おのれを弁えず、怯えながら、素裸で群衆を掻き分けて突進するもの。仰せのとおりです。つまり、あなただって、それほど上出来だとはお聞きにならなかったでしょう、私の挨拶はソネット最初期の様式に則ってい

るので**、最終行の脚韻が前行と韻を踏むのは破格ですし。請け合いますが、その一語一語が人さまごまな鼓膜を経てあなたのもとまでこだましていき、多彩な理解へ開かれた精神を魅了するにいたらなかったとしたら、あなたもそんなに感心しかったはずですよ」

—「きつとね」と、私たちの思いは華やいだ夜風のなかで一心同体となって認めた。

注

* 以下に原詩を掲げる。

La chevelure vol d'une flamme à l'extrême
Occident de désirs pour la tout déployer
Se pose (je dirais mourir un diadème)
Vers le front couronné son ancien foyer

Mais sans or soupirer que cette vive nue
L'ignition du feu toujours intérieur
Originellement la seule continue
Dans le joyau de l'oeil véridique ou rieur

Une nudité de héros tendre diffame
Celle qui ne mouvant astre ni feux au doigt
Rien qu'à simplifier avec gloire la femme
Accomplit par son chef fulgurante l'exploit

De semer de rubis le doute qu'elle écorche
Ainsi qu'une joyeuse et tutélaire torche.

** (原注) イギリス・ルネサンス時代に用いられていた。

葛藤

ずいぶん前から、最近まで—こう信じこんでいたのだ—わが想念は外部の事件（たとえ真実のものであろうと）にまったく煩わされず、偶発事よりも、自らの原理の中からおのずと迸りでるものを汲みあげるようになった、と。

人里離れた一軒家への好み、それこそ上述の心性にうってつけに思われようが、今や私は前言をひるがえさざるを得ない。確かに、訪れる年ごとにいつも同じ満足に浸ったものであった—今年を除けば—、屋外の石組み階段を緑で覆う夏の到来とともに、冬中閉め切ってあった鎧戸を外壁側に押し開け、留守の間不動のままでいた光景へ新たな親愛の目配せを送るたびに。これまで廃屋はこまめな再訪を裏切ることはなかったのだが、今、その虫食い鎧戸の音は、階下の浮かれ騒ぎ、^{リフレイン} 畳句のようにくどい科白や口論を、朗詠の句切りよろしくただ強調するばかり。私は思いだす、毎年その無傷な一隅に出没してきた館が不幸にも労働者の一団に侵略され、地方全域、静寂に恵まれてきたのに、鉄道敷設で踏み躪られつつあるという噂が突発し、出かけるべきか否か、出立間際に私がどれほど悩んだか、決めかねるほどであった顛末を。一仕方があるまい、もう一度訪ねてやろう、それは馴染みの土地を、必要なら勝手なやり口に訴えてでも、わがものとして守り抜くことになろう、そう考えて私はやって来たのだ。さまざまなかげがえのない景観が消失している中で、その場所がもっともひどい侮辱を蒙っていたが、だからこそかえって盲目的な愛情を覚える。私は滞在地の没落を見届ける客となったのである。信じがたいことに、顧みる人がなく、自分だけのものだということで愛おしんできた定宿は、世の中の進歩によって鉄道工夫飯場と化していた。

土木作業員や井戸掘り人夫たち、青っぱいビロード脚絆を巻いた彼らの動きにつれて盛り土がひとりで移動するかに見えるが、彼らが休憩中、掘りあげた溝の中に肌着の白と青の横縞を並べているさまは、水がひたひたと満ちてくるようだ（衣服の不思議！まことに人間の中にこそ、人間が探し求める源泉がある）。まさしく彼らだ、わが現在の同宿者たちは一かつて道で出会ったとき、いかにも労働者らしい労働者としてひそかに好意を寄せた人々だ。噂では渡り職人ということだった。疲れ切った者も強壮な者も、大地に人の手が増えられるところならどこへでも群がって、工場の影もない野外の風雨に曝されながら、彼らは独立独歩の境地を見出す。

定住していれば親方だ、誰に気兼ねもなく大声をはりあげる。—私は騒音に病む質で、世人が悪臭を忌み嫌い、大音声にわりと寛大なのが不思議でならない。この騒々しい集団は鶴嘴とシャベルを肩に担いで出入りする。さてこの群集、後頭部から感動を手繰りよせて好意を惹き、率直に話を進めるように強いる、「閑文字など弄して！」と誹られる想念を用いて。最前、敵対する信者よろしく地下礼拝堂すなわち共同物置場の中へ入りこんだとき、並べられたふたつ道具、例の鶴嘴とシャベルという性的な両者を前に—その金属は労働者の純粋な精力を要約しており、未開墾の土地をいわば受胎させるからだ—不満をこえて私を捉えた敬虔な思いが昂じ、つい脆いてしまうほどであった。どんな法律家も、意表をついて住みついたが家主にはすでに支払いを済ませてさえいる闖入者を立ち退かせて、鼻を高くするわけではないから—暗黙に賃貸契約を結ぶのが土地の習慣なのだ—、私がその役を務めなければなるまい、つまり自分の権利の侵害をできるだけ阻止しなければなるまい。だがどんな口上にせよ、私がそれを述べる成り行きになれば、幾分の侮蔑を伴うに相違ない、寄合所帯はふだん私の好まぬところだからである。あるいはまた、場所柄にふさわしく、こんな風に切りだすことになろうか？—同志諸君、一例えば—諸君には想像も

つかないでしょう、どのような民衆も踏みこませないこの風景、私が望んだとおり孤絶した場所に広がって、水源を守護するように深い森をなしているこの風景の隅々まで、いわば精神を放散させている人間が居ようとは。しかし私の場合はまさしくそうなのであって、諸君が悪態をついたり、しゃくりあげて泣きわめいたり、殴り合って怪我をしたりすると、その場違いな不協和音は、光り輝いて静止した大気中に亀裂が走るのと同じく、あらゆる亀裂の中でもっとも耐え難い亀裂を、ただしこちらは確かに目には見えない亀裂を、生じさせることになるのです。一口を嚙んでいるのは、こんな告白をしても単純な相手ではなんの甲斐もないと恐れるからではない、それはほかの誰にもまして彼らに強い感銘を与えるはずだし、わが隣人となる十一人の紳士は途端に失笑するだろうが、彼らならそうはするまい。すなわち彼らは酔っぱらえば驚異を見る力を得、また重労働に喘いでいるだけに、どこか秀でたところのある繊細さには感じやすいからだ。おそらく詩人としての私の骨身を削る特権の中に、厳密な意味で社会的な差別、日陰者にされてしまう差別はまったく認めず、個々の人間としての違いだけを見てとるだろう—要するに彼らはしばし身を慎んで大人しくするかもしれないが、それも束の間、まためでたくいつもの習慣に舞い戻り、すべてを忘れて楽しむだけだ。ただしそのひとりが私と対等に渡り合い、間髪を入れずこう応ずるかもしれない。—俺たちは仕事が終わればほんのちょっとでも合流してともに過ごしたい欲望を覚える。誰が喚きたてるというのか、俺か、彼か？ 彼の大きな音を聞いて俺は気が大きくなり、疲れも吹っ飛んだ。だからほかの男が叫ぶのを聞くことは、それだけで酒を飲むのと同じ効果がある、しかも金は一文も要らない。—彼らの合唱は揃ってはいないが、なるほど不可欠のものである。急きたてられるように私は防御を解く、最初に防衛心を研ぎすましたのと変わらぬ鋭敏さをもって。そして当の侵略者の手を取って招き入れる。嗚呼、明らかに夢見る人本来の使用のため、黒々とした木立に囲まれ、広大な空間の奥に隠れ家として封じこまれてきたのだ、この屋敷—俗な言い方がよいなら、この「私有地」は！それを私物化する権利を逸してし

まったわけで、今後も生きているかぎり頑なに一たとえ取得する手段があっても無視して一とり逃がしつづけなければならない、なにひとつ所有せず通り過ぎるにとどめたいという、なんとも奇妙な本能を満足させるために。それには今回のように、居場所が不慮の出来事に無防備に曝されてしまっても仕方があるまい、この出来事はみながみな偶然というわけでもない、私がひとり立ちするに及び、件の本能は私をプロレタリアに近づけつつあるからである。

だが今から見当がつく、私が本当にプロレタリアと一緒にする時節が到来したら、共感と反発を交々に覚えるであろうと…

—いっそのこと、きっぱり縁を切るために、彼らのうちの誰かが私に喧嘩を売ってくればよいのだが。それまでにとるべき戦術はこれしかない、当面、わが芸術によって白砂と百花で飾られた瀟洒な庭、池に臨んで雛壇をなしている庭を、閉ざしてしまうこと、田舎住まいのこの部屋を密閉してしまうことだ…。縁なき衆生にその敷居を跨がせないようにするのだ、そうすれば居酒屋めざして進むように嬉々として、労働者たちは、麦刈り後の畑を借りて造成した道伝いに、仕事場へ赴くだろう。

「糞野郎！」門の鉄格子を蹴りつけながら、荒々しくそう浴びせられる。このじつに好ましい言葉が誰を指しているのか悟ると、いかになんでも！相手が酔いどれだと分かっているでも一顔を鉄柵につけた大男だ一ついわれにもなくムツとしてしまう。これは差別意識のなせる業かという、まったくそうではなく、私は今、個人と個人との間にいかなる区別も設けてはいないから、この狂った男、千鳥足で喚きたてている男を、まともな人間とみなさざるをえない

のだが、一方で彼に対する怨恨を否定することもできない。強く刺すような目つきで、敵意をこめ、彼は私を睨みすえる。その姿を、たとえ心の中でも消してしまうことは不可能かもしれない、酒の働きに拍車をかけること、泥酔のあげくそうなるまえに彼を土埃の中に横転させること、そしてにわかにも粗野で底意地の悪くなったこの肥大漢が存在しないようにすることは、不可能かもしれない。彼の口から溢れるように繰り出される新たな挑戦的言辞にとうとう堪忍袋の緒を切らし、階級闘争なるものの好例を芝生のうえで実演するかのごとき殴り合いにまで行きつかぬかぎりには。しかし彼の業病である飲酒癖が、いずれは私の代わりに必要な一切の役を演じてくれよう。それを知りながら黙^{だんま}りを決めこんでいるのは共犯者になるにひとしいから、疾しさに苛まれるほどである。

すべて、互いに矛盾しあい徒に歪められたふたつの身上が引き起こす苛立ちにほかならず、なんと馬鹿げた酩酊の余波が、こんなふうにくいくかの動揺を通して私の許まで及んできたわけである。

こだまの領分では、その中に没入している間、人は静寂を守らなければならない。これまで私はそういう静寂にさえ恵まれていた、それはとりわけ日曜日の夕べともなれば完全な沈黙にまで深まった。この日没時が心に染みる、万象は影に包まれる寸前、真昼のような透明さを帯び、ついでその明るい透明さがある種の深みへと注ぎこむ。私はその急変する光景を平穩に目撃するのを好む、そしてこの光景が誰か親身な人の立ち会いを求めることを望む。件の仲間たちも、彼らなりにこの瞬間を愛でている、夕飯が済んで寝るまでのあいだ、

日当のことを話し合ったり、きりもなく議論しつづけたりするのだ、この景観の中に寝転んで。私はひとり超然と談合には加わず、窓辺一窓はこの古い建物が、そのみぞ知る場所に向けている眼であり、私はその眼になっている——から離れてこの集団に近寄ったりはしない、なんの甲斐もないからだ。こういう場合いつものことで、今さら仲間入りしても仕方がない。私は案ずる、人と人との間に、触れ合いが起こらないこともありうるのではないか。——「俺に言わせれば」とひとりの声「俺たちみんながここで汗水垂らしているのは、ほかの奴らのためだ」——「いやそれどころか」私は小声で口を挟む（つもり）「諸君が働くのは報酬を貰って真っ当に生きるためだ、つまりほかならぬ自分のためなのだ」——「そうとも、ブルジョワども」私には不当な言いがかりだ「鉄道を敷こうというのさ」——「私ではないよ、少なくとも」微苦笑して「私は諸君をこの地方に呼び寄せはしなかった、贅沢にも針一本落とす音さえ高らかに響くほど静かだったこの地方がすっかり様変わりして、私は困り果てている」。こうした話し合いは、私の側では口外されぬまま頻繁に遣りとりされたが、呪縛されたかのように、はたと途絶える。なんと美しい宝石のきらめきか、たなびく夕焼け雲は！あらゆる人間の尋常な口はすべて沈黙する、大地の間近に寄せられ、そこに言葉のむなしさを吐きだすかのようだ。先の遣りとりで私はこう話を結ぼうとしていた「きっと私だって、やはり仕事をしているのだ……どんな仕事を？ そう言い返すものは誰もいなかったろう、会計係の仕事ぶりを見慣れているので、腕から大地ではなく、頭へ転化される仕事があることも認めているから。どんな仕事だと一口にはださない、ただ心のなかで、ひとつのこだまが反響する一万物の交換法則に則り、少なくともなにかの役に立つ仕事だよ。とはいえ、悲しいことに、私の生産品は、夕焼け雲や星座と同じく、本質上この連中の腹の足しにはならない」

じつのところ、今日なにがあったのか？

労働戦線の軍団が、集結地点に横たわっている、戦いに敗れて。彼らはひとりまたひとりと現れて軍勢に加わり、ここ、草の中にへたりこむ、みな砲弾をあびたようによろめきながら、この狭苦しい戦場に辿りつき倒れ伏すだけの力を辛うじて見だしたのだ。死体を思わせる、なんという眠りだろう、無音の芝土に身を投げだして。

かくて私は思いのままに眺め入り、夢見ることができる。

いや違う、私の視線が、肘突き凭れている開け放たれた窓から地平線の方角へと逃れ去れば、不埒にも、私のなかのなにかが、あたり一面に散らばる禍の犠牲者たちのうえを跨がざるをえず、今度は私が敬意と礼儀を失することになってしまう。私はあくまで分を守って、この禍の謎を理解し、その務めを判断してやらねばならない。というのも、パンのみが生きる糧ではない多数派の人々とは逆に、この者たちにはパンさえも足りていなかったからだ—週の大半を苦しみぬいて、とりあえずパンを得ようとした、そして今はかくのごときありさまだ、明日をも知らず、夢のなかを匍匐し、影絵のように鶴嘴を振るう一つまみおのれの運命のままに墓穴を掘っている、それはこれまで毎日、現実の地盤に穿ってきた穴（いわば神殿の基礎工事）にひとしい。彼らは神聖さの取り分を実生活ののなかに割り振るのだ、恭しく、それがいかなるものか示さず、またそれを華やかに祝う祭が営まれもせず、ただ眠りという、停止と、待機と、束の間の自殺によって。秘められていなければ燦然と輝くはずのこの認識—毎日の仕事にこめられたひとつの誇り、すなわち引力に抗してすっと立てみせる誇らしさの認識—は、付近一帯、神殿の列柱さながらに立ち並ぶ大樹

によって称揚されているが、ある種の本能がそれを探し求めた先は乱立する小さな酒盃の中であり、結果として彼らの身体をかくのごとく歪ませてしまうのだ。そして儀式を完璧に遂行したすえに彼らは祭司というより生贄となり、激務ゆえの痴鈍化を象徴するにいたる、式の段取りが意志ではなく宿命に従っただけだとしても。

星座が徐々にきらめきを増してくる。私の願いが通じたかのように、この盲いた群れのうえを速やかに過ぎる闇の中にも、光の点がいくつか現れ、やがてある思念の星座となり、固く閉じた目には見分けられずとも、いつまでも照らしつづけて欲しい—事実を正確に見きわめ、はっきり口に唱えられるように。したがって私は彼らのことが頭から離れない、なんたる邪魔者たちであろう、身を投げだしていつまでも私の視線を遮り、日没の遠景を見つめさせてくれないとは。喚きたてていた先ほどのほうが、まだましだ。じかに四大を相手にする仕事の職人たち、尽きることのない澄んだ流れのほとりで彼らの寝ずの番をしながら、私はついそこに民衆を見てしまう—筋骨による人間の条件の理解が、日々彼らの背骨を湾曲させる、そうして、麦を仲立ちにせず、即時にパンの臨在を保証する生命の奇蹟を引きだすのだ。ほかの仲間たちはつとに掘削を行って水路を開いた、今度もその同胞が皇道を築いて機関車を通そうとしているが、ルイ＝ピエールとかマルタンとか、ポワトゥーとか「北部者」とか、眠っていないときには、母がくれた幼名や田舎の通称で、そのように呼び交わしている。だがむしろ、出自は匿名性のなかに埋没してしまった、そして果てしない眠りは、万物の生成源にして今は彼らを平伏させている大地に耳をつけ、過去の全世紀に押し拉がれるとともに未来の全世紀に伸び広がり、永遠へと到る、ただしそれが可能なかぎりですつまり人間社会の規模に矮小化されて。